

県央水戸アグリ情報

令和5年度 第2報

(令和6年2月発行)

発行：茨城県県央農林事務所経営・普及部門

(水戸地域農業改良普及センター)

Tel 029-227-1521

Fax 029-225-0955



若手農業者の育成

茨城県県央農林事務所経営・普及部門（以下当部門）では、県央地域の就農後間もない農業者や農業後継者を対象に、農業経営者としての資質向上を目的とした様々な支援を行っています。今回はその中から2つの活動を紹介します。

水戸地域農業学園

当部門では、就農後間もない農業者を対象に、農業の基礎知識・技術の習得や仲間づくりを目的として、毎年「水戸地域農業学園」を年に7回程度開催しています。今年度は、7月31日に開講式を行い、これまでに6回の講座を開催しました（1月末現在）。

11月16日に開催した「販路開拓講座」では、つくば市内に2店舗ある株式会社カスミの新業態「BLANDE」のうち、食に特化した店舗である「BLANDE 研究学園店」を視察しました。講義では、長年野菜のバイヤーを担当してきた地域商品青果マネジャーを講師としてお迎えし、BLANDEに仕入れる商品の特徴や流通の仕組みについてお話を頂きました。

参加者からは、取り扱いやすい商品の特徴やバイヤーとの繋がり方など、多くの質問が出されるとともに、「自社の戦略やコンセプトをしっかりと持つことの大切さが分かった」等の感想が聞かれたことから、販路開拓に対する関心の高さがうかがえました。

今後も、参加者の意向を踏まえ、農業経営者として役立つ講座を開催していきます。



「販路開拓講座」の様子



BLANDEの商品陳列を学ぶ

県央地域農業後継者クラブ合同視察研修会

8月7日に、県央地域で活動しているひたちなか市農業後継者クラブ、小美玉農業青年クラブ、茨城町4Hクラブの3つの農業後継者クラブ員18名が合同で笠間市にある株式会社アドバンフォースと株式会社小田喜商店を視察しました。2社とも受講者の関心が高かった、栗の加工を行っている企業です。

株式会社アドバンフォースでは、栗やかんしょのペースト加工の現場視察後、同社の農福連携の取組みについて説明を受けました。

株式会社小田喜商店では、地元の栗の歴史や商品開発に対する取組みについてお話を頂いた後、栗の貯蔵庫や加工機器を見学しました。

合同研修会の参加者からは「他市町村の農業者と意見交換ができて良かった」との意見が出されたことから、今後も農業後継者クラブ同士の交流の場を提供していきたいと思えます。



合同視察研修会
(株式会社アドバンフォース)



農業後継者クラブの集合写真

農業いばらきがWebサイトになりました

農業に関する技術や経営・流通、制度・事業など様々な記事が掲載されている会員登録不要の無料サイトです。ぜひ、ご覧ください。

<https://nouiba.jp/>

農業いばらき

検索



農業いばらき



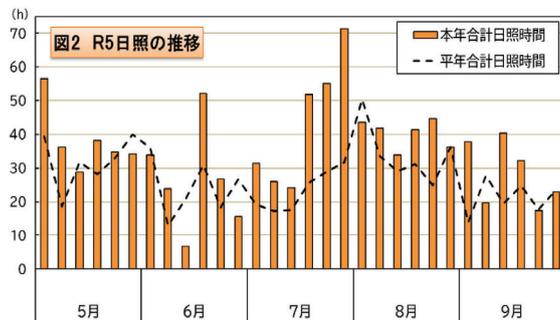
R5年度水稲の振り返り

田植え～出穂期（5月～7月）までの気象は、平年に比べて平均気温は0.9℃高く、日照時間は128%多く、出穂期は平年に比べて1日～4日早くなりました。登熟期間（8月～9月）の気象は、平年に比べて平均気温は2.9℃高く、日照時間は124%と多くなりましたが、登熟期間は40～41日と平年並でした。

草丈は平年並～長い、茎数はやや少ない～平年並、葉色は淡い傾向で推移しました。稈長、穂数は平年並で、有効茎歩合は平年に比べてやや高くなりました。収量構成要素の一穂粒数は平年に比べて少ない～平年並で、登熟歩合は平年並～やや高い、千粒重は平年並～やや重い結果となりました。収量は平年に比べて多くなりましたが、未熟粒等が多くなったことから、整粒歩合は前年に比べて54～63%と低くなりました（表）。

表 管内定点ほ場結果 ※整粒歩合のみ平年値ではなく前年比

地点	区分	稈長 (cm)	穂数 (本/m ²)	有効茎歩合 (%)	一穂粒数 (粒/穂)	登熟歩合 (%)	玄米千粒重 (g)	実収量 (kg/10a)	整粒歩合 (%)
水戸市 环大野	R5	93	420	73	67	87	22.2	619	63.1
	平年比 (%)	101	98	105	90	101	102	107	67.8 (R4)
茨城町 上石崎	R5	87	323	75	86	87	22.2	522	54.1
	平年比 (%)	100	101	109	102	105	101	111	62.2 (R4)



ほ場の排水対策について

近年の気候変動によって、局地的な豪雨による災害が増えており、農作物への被害も多くなってきています。今後もこのような異常気象が続くことが懸念されるため、特に排水不良地で農作物を栽培する際は事前の排水対策が必要となります。そこで、事前にできる「ほ場の排水対策」をご紹介します。

① 明渠の設置

ほ場の周囲に沿って20～30cmの深さの溝（額縁明渠）を掘ります（写真1）。ほ場が広い場合は、ほ場内にも長辺と平行に明渠を設置すると効果的です（ほ場内明渠）。なお、強制排水させるため、落水口と明渠は確実に接続するようにします。

② 高うね栽培

湛水しないようにロータリー成型機で高うね（20cm程度）にします。うね間と明渠を接続することで、うね間の湛水を防ぐことができます。

③ 機械による心土破碎や傾斜化

大型機械がほ場に入ることによって、緻密層が形成され、土壌が硬くなることから排水不良を起こす場合があります。対策には、サブソイラやプラソイラ等による心土破碎が有効です（写真2）。また、レーザーレベラーによってほ場に傾斜（100m当たり10cm）を付けることで、水はけが良くなります。

④ 緑肥の播種

マメ科のセスバニアなど、深根性の緑肥は根が下層土まで届くため、透水性を改善します（写真3）。※緑肥の利用方法や種類についての詳細は農研機構の「緑肥栽培マニュアル」を参考にしてください。



写真1：額縁明渠の設置



写真2：プラソイラによる耕盤破碎



写真3：緑肥 セスバニア「田助」(生育中期)



「緑肥栽培マニュアル」
(農研機構)

防鳥網の適正使用をお願いします

カモ類（マガモ・カルガモ）やオオバン等による食害は、れんこん栽培における問題の一つです。その対策として設置されている防鳥網に野鳥が絡まってしまうことがあるため、適正な管理が必要です。

防鳥網を使用する際は、粗い網目や細い糸のものは野鳥が絡まりやすいため、「網目 30mm で 1000 デニールの強力防鳥網」を使用するとよいとされています。

なお、立体式防鳥網を使用している場合は、ほ場に入ったりするとき以外（特に収穫後）は、必ずサイドネットを閉じるようにしてください。

また、防鳥網の張りがゆるいと、野鳥が絡まりやすいので、ピンと張るようにしましょう。

万が一、防鳥網に野鳥が絡まってしまった場合は、速やかに放鳥してください。



写真1：30mm目 1000 デニールのネットを用いた直置防鳥網の例

ニラ黒腐菌核病の対策について



ニラ黒腐菌核病は、糸状菌（かび）による病気で、菌核が土壤中で長期間生存し、伝染源となります。

今作での発生が 10%未滿の圃場では、ネギ属以外の作物との輪作や緑肥（カラシナ、ムギ）の作付け、ハウス栽培では土壤還元消毒の実施などの対策を講じましょう。

土壤還元消毒は、地温が確保しやすい夏の実施が理想的ですが、初夏（5月中下旬～6月中下旬）の処理でも効果を確認できました。ただし、初夏の処理は効果が不安定になりやすいため、以下のポイントをおさえて実施するようにしましょう。



写真1：ニラ黒腐菌核病の典型症状

初夏に土壤還元消毒を成功させるポイント

- ・前作の残渣は前もって持ち出すか、十分腐熟させる。
- ・米ぬか又はふすま混和後、灌水チューブを設置し、ビニール被覆前に、2時間程度の予備灌水を行って軽く湿らせておく。
- ・端までしっかりビニールで被覆し、1晩程度灌水した後、出入口を含めハウスを隙間がないようしっかり密閉し、1か月程度放置する。
- ・処理開始直後から3日間晴天が続く日を選んで実施する。

貯蔵期のサツマイモ基腐病の注意点について

サツマイモ基腐病は糸状菌（かび）によって引き起こされ、保菌した苗・イモ・残渣（葉や茎の残がい）等が伝染源となります。発生すると防除が難しく、被害が拡大する恐れがあるため、貯蔵期には以下の点に注意しましょう。

- サツマイモ基腐病に感染したイモは、なり首側からゆっくりと腐敗します。
- 収穫時に症状がない場合でも貯蔵中に腐敗することがあります。
- イモが腐敗する主な病気は、基腐病以外にも、黒斑病、白腐病、軟腐病等がありますが、疑わしい症状のイモを見つけた場合、そのイモを貯蔵しているコンテナを隔離し、速やかに当部門までご連絡ください。

また、茨城県では、令和5年5月に近年の病害虫の発生状況に対応するとともに、化学農薬に頼りすぎない、環境に配慮した適切な病害虫防除対策を推進するため、「茨城県総合防除計画」を策定しました。サツマイモ基腐病については、かんしょ大産地である本県において、特に発生を警戒すべき病害であることから、すべての農業者（家庭菜園を含む）の方々に守っていただくルール（遵守事項）を定めました。

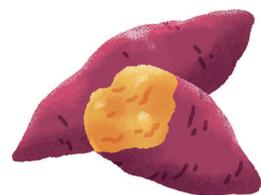
詳しくはこちらから



茨城県病害虫防除部ホームページ



茨城県総合防除計画概要版



トマトキバガの発生について



令和5年10月に本県では未発生であったトマトキバガの発生が確認されました。トマトキバガは、これまでに本県を含め合計35道府県で発生が確認されています。発生が疑われた場合には、速やかに当部門までご連絡ください。

被害の特徴

ナス科植物が主な寄主植物である。トマトでは、葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、葉肉内に孔道が形成され、食害部分は表面のみを残して薄皮状になり、白～褐色した外観となる(写真1)。果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に数mm程度の穿孔痕が生じるとともに食害部分の腐敗が生じる(写真2)。

防除対策

ほ場をよく見回り、見つけ次第捕殺する。被害葉や被害果は、ほ場から持ち出し、ビニル等に入れ、一定期間密閉して成幼虫を死滅させるなど、適切に処分する。

写真1



写真2



写真1・写真2：農林水産省植物防疫所原図

農福連携に向けた「農作業体験会」の開催

農業者の労働力確保・福祉事業所利用者(以下利用者)の就労を目的とし、農業者と福祉事業所による「農作業体験会」が水戸市(10月4日)と茨城町(10月16日)で開催されました。

水戸市では、ネギ調製作業の農作業体験を行いました。この農場では、ネギの根をほぐしてカット機械に乗せる作業を1人で行っていますが、根がほぐれないために作業が中断してしまうことがありました。利用者に作業委託するために根をほぐすだけの担当を設けたところ、ミスなく行えるようになりました。

茨城町では、加工用トマト収穫後マルチ撤去作業の農作業体験を行いました。作業工程は、利用者3人のうち2人がマルチの両端を引き抜き、もう1人がマルチをまとめました。

このように、農福連携では作業を細分化・単純化して誰もが作業をしやすくすることが重要となります。

当部門では、今後も農福連携導入のために作業工程の見直しや作業負担軽減に関する支援をしていきます。



水戸地域就農支援協議会※ 担い手確保・育成担当者研修会を開催

水戸地域就農支援協議会は、11月7日に水戸合同庁舎で担い手確保・育成担当者研修会を開催し、市町村担当者や就農支援アドバイザーなど23名が参加しました。今回は、就農相談を受ける立場として、今までの成功、失敗事例について学ぶことで、今後の就農相談に活かしたいとの声があり、「新規就農者の成功事例と失敗事例」をテーマとしました。

最初に、日本政策金融公庫より、「新規就農に大事なこと」として金融機関の立場から、審査のポイントを含めた講義、次に、「第三者継承」の優良事例として、田村きこの園の川島氏から自身の経験を踏まえた第三者継承の成功要因、考察等を発表いただきました。次に、茨城県の事例として、茨城県農業総合センター専門技術指導員からは県内の概要を、当部門からは水戸地域の事例として、管内新規就農者29名について分析を行った結果について説明を行いました。特に、成功事例とされる方の販路や品目、売上は1,000万円を超えるものの所得が低い事例、5年目は失敗事例に分類されたものの、その後減価償却費の減少や販路開拓により所得が大きく向上した事例等について情報を提供したところ、出席者からは、多数の質問が出され、活発な意見交換となりました。

当部門では、今回の事例から学んだことや共通の課題を今後の就農相談に活かし、今後も関係機関と連携して、地域農業の担い手の確保・育成に取り組んでいきます。



研修会の様子

※市町村農業関係課、農業委員会、JA水戸、JA常陸、JA新ひたち野、当部門及び就農支援アドバイザーを構成員として、地域農業の担い手の確保・育成を推進するために設立されています。

インボイス制度が始まりました

令和5年10月1日から消費税の仕入税額控除の方式としてインボイス制度が開始されました。詳しくは国税庁ホームページをチェック!

